号泣 35歳で長男死去

胎内被爆影響かと苦悩

「剛（つよし）」という名には、心身ともに強い大人になってほしいという願いを込めた。広島に原爆が落ちた時、梶野清子（94）＝松山市＝のおなかの中にいた長男の剛は、幼いころから体が小さく、体力もあまりなかった。よく鼻血を出しては学校を休む。清子が振り返ってみても、どうやって大人に成長していったのかと不思議に思うくらい、体の弱い子どもだった。

高校卒業後、剛は市内の薬品会社で働いた。突然、倒れて病院に運ばれ、腎臓病と診断されたのは、19歳の時だった。持ち直して働き、結婚もして子どもも生まれたが、29歳で再び倒れて危篤状態に。命は取り留めたが、人工透析治療のため、病院に通い続ける生活になった。

「心根の優しい子でした」。剛は結婚して実家を離れた後も「お母ちゃん元気か」とたびたび顔を出し、清子を気遣った。経緯は分からないが、剛は自分が胎内被爆したことを知っていた。だが、病気を原爆のせいだと口にしたことはなかった。

「息子に申し訳なくってね」。胎内被爆が影響しているのではないかと思い、清子は日ごとに衰弱する姿を見ていられなかった。「できることなら代わってやりたかった」。清子は剛を病室に見舞った後、急に目の前が真っ暗になり、通りすがりの人に支えてもらったこともあった。

剛は闘病生活を続けた末、１９８１年に35歳の若さで息を引き取った。葬儀で、清子は棺おけにしがみついて泣いた。一緒に入ろうかという思いさえ、よぎった。生まれる前の戦争で胎内被爆した剛。「一体、何の罪があったと…」

放射線衛生学者で独協医科大准教授の木村真三（鬼北町出身）によると、胎内被爆と腎臓病の因果関係は不明だが、関係ないとも言い切れない。そもそも剛のように爆心地から1キロという近さで胎内被爆し、大人まで生きたような例は少ないという。

平和記念公園（広島市中区）の原爆慰霊碑に納められている原爆死没者名簿には、犠牲者の名前や死没年月日が毎年加えられる。夫の勇は81年、長女広子と剛の名前を登載する手続きを取った。広子は1歳2カ月で被爆直後に亡くなっていたが、勇はずっと登載申請をしてこなかった。

なぜ、あの時になって勇が思い立ったのか。その理由は分からない。口数の少なかった勇は、家庭で被爆について語ることはなかった。それまで慰霊の式典に参加した様子もない。家族には、どことなく被爆の過去に触れないようにしているように見えていた。

勇は、当時34歳になっていた次女の恭子と、その息子を連れて、名簿を奉納する広島平和記念式典に参列する。被爆から36年がたっていた。

（敬称略、中田佐知子）

被爆当時、おなかにいた長男の剛を抱く梶野清子。心根の優しい自慢の息子だった＝1940年代後半、現広島県北広島町

えひめ 戦後70年

時を超え苦しみ続く

愛媛の被爆者健康手帳所持者数は２０１５年３月末現在、８８４人（全国18万３５１９人）で、胎内被爆者は38人（同７２９２人）いる（厚生労働省調べ）。広島平和記念資料館によると、１９４６年初めごろから、胎内被爆者に知的障害や発育不良を伴う小頭症などが見受けられるようになった。

広島市で胎内被爆した原爆胎内被爆者全国連絡会世話人の松浦秀人さん（69）＝松山市＝によると、同じ胎内被爆者でも健康状態は異なっている。「自分や子どもには放射線障害の症状はないが、連絡会メンバーには、白血球が少ないと言われた人もいる」

被爆者から子どもへの遺伝的影響についても一般的には解明されていないとされている。松浦さんは「結婚や出産に悩んだ。今後は隔世遺伝しないかと不安を抱いている」とし、「時を超えて人を苦しめ続ける」核兵器の非人道性を訴える。

「被爆2世」と呼ばれる被爆者の子どもは全国に50万人いると推測されている。厚生労働省は「被爆2世への放射能の影響について科学的知見は認められない」としているが、被爆2世の団体は影響があるとし被爆者援護法の適用を求めている。

（高田未来）

(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。